

チャンキヤ『宗義書』における 部派仏教に関する記述(2)

木村 誠 司

I

前稿では、チャンキヤ(ICang skya, 1717-86)¹⁾の『宗義書』(grub mtha')²⁾「毘婆沙師」(Bye brag tu smra ba, Vaibhāṣika)章から、部派分裂の記述を訳注紹介した。所謂バヴヤ(Bhavya)1-3説³⁾を踏まえたものであった。本稿はその続編である。残されたのは、ヴィニータデーヴァ(Vinītadeva, 調伏天)説を示す部分と付随説明、そしてチャンキヤが力を入れた「付論」(zhar byung)である。「付論」と言っても、チャンキヤが真に述べたいことは、ここに現れていて、説一切有部(Sarva-asti-vādin)等の諸部派を一括批判する。基本的には、中観帰謬派(dBu ma thal 'gyur pa, Madhyamika-prāsaṅgika)の立場から、批判を展開しているのは明白である。しかし、それを追うのは、容易ではなかった。自学派の先達である、ツォンカパ(Tsong kha pa, 1357-1419)やケードゥプジェー(mKhas grub rje, 1385-1438)等の著作を自在に引用して見せたり、誰とも知れぬ諸説を使い自説を述べたり、さらには、説一切有部の著名なる綱要書『俱舍論』*Abhidharmakośabhāṣya*を取りあげ、その犢子部批判の方法論を俎上に乗せたりもする。つまり、チャンキヤは、有数のインド学僧、世親(Vasubandhu、ヴァスバンドゥ)を揶揄するかのような書きっぷりをみせるのである。このような複雑に絡み合った論述は、正直、筆者の手に余るものであった。その難解さに自らの非力を思い知らされ、断念しようかと思っただが、好奇心に負け、拙い訳でも提示することにした。是非、ご叱正を賜り、不備を補っていきたくと切に願うばかりである。

加えて、読後、ある種の違和感を禁じ得なかった。チベット仏教文献に触れた方なら、お判りいただけると思うが、チベット仏教、特に後期では、中観帰

謬派が登場すると、俄かに、神韻を帯びる気がする。それ以外のものは、最早、仏教ではない如くに扱われてしまう。チャンキヤにも、そういうところが見えたような気がして、腑に落ちなかった。と言っても、所詮、チャンキヤと筆者では、学識に雲泥の差があり、このような感想を抱くこと自体おこがましいのかもしれない。「井の中の蛙大海を知らず」の類としてお許し願いたい。

さて、前稿でも触れた通り、「毘婆沙師」章の概要は、シノプシスと共に、既に、池田練太郎氏によって、公にされている⁴⁾。筆者も池田氏の論文を参考に、若干の補足を加え、前稿でシノプシスを提示した。ここでは、訳注する個所のシノプシスを前稿から転用し、さらに、筆者の整理したものを加えてみた。取り分け、晦渋極まる「付論」解読の目安となることを目指したものの、結果的には、チャンキヤの展開には付いていけなかった。以下では、本論の残りの訳注をⅡとして示し、付論のそれはⅢとして提示することとしたい。

注

- 1) チャンキヤの事績については、Xiangyan, Wang, *Tibetan Buddhism at the Court of Qing: The Life and Work of ICang-skya Rol-pa 'i-rdo-rje* (1717-86) がある。これは1995年ハーヴァード大学提出の博士論文である。前稿では紹介していなかった。題名の通り焦点は、清朝におけるチャンキヤの政治的役割にあり、仏教学的面には簡単に触れるのみである。同じようなテーマを扱ったものとして、石濱裕美子『清朝とチベット仏教—菩薩となった乾隆帝—』2011がある。他に、根本裕史「チャンキヤ・ロールパードルジェ『知見の歌』研究序説」『比較論理学研究』14, 2017, pp.57-68 (ネットで披見可)にもチャンキヤの事績が示されている。
- 2) 注1)のX, Wang本には、以下のように、チャンキヤの『宗義書』起草に関する記述がある。

近くにチャンキヤは、小庵を持った。何年か前、夏季の蒸し暑さに慣れないチャンキヤを住まわせるために皇帝が建てたものである。チャンキヤは、香山のような涼しい場所で、大いに寛ぎ、そこで仏教の理論と実践についての重要な著作『学説規定 牟尼教須弥山の麗節』をなした。(p.105)
- 3) バヴヤの呼称問題については、拙稿「チャンキヤ『宗義書』における部派仏教に関する記述(1)」『仏教学部研究紀要』76、平成33年、pp.143-141、Ⅲの注4)を参照されたい。
- 4) 池田練太郎「ICaṅ skya 宗義書における Vaibhāṣika 章について」『日本西藏学会々報』25, 昭和54年、pp.1-4。

II

II-1-1-2-1-4 ヴィニータデーヴァ (Dul ba lha, Vinīta deva) [『異部説集』 *sDe pa tha dad pa bstan pa bsdus pa, Nikāyabhedopadeśana-saṃgraha*] 説と付随説明 56a/1-57a/1

II-1-1-2-1-4 師 (slob dpon, ācārya) ヴィニータデーヴァ (Dul ba lha, Vinīta deva) は、[『異部説集』 *sDe pa tha dad pa bstan pa bsdus pa, Nikāyabhedopadeśana-saṃgraha* において] 東 (Shar, Pūrvaśāila)¹⁾、西 (Nub, Aparāśāila)、雪山部²⁾、説出世部 ('Jig rten 'das par smra ba, Lokottaravādin)、説仮部 (bTags par smra ba, Prajñaptivādin)³⁾ 諸部たる⁴⁾ 5 部 (tshan) は、大衆部。根本〔説〕一切〔有〕部 (gZhi kun pa, Mūlasarvāstivādin)、飲光部 ('Od srungs, Kāśyapiya)、示地部 (化地部) (Sa ston sde, Mahīśāsaka)⁵⁾、法護部 (Chos srung sde, Dharmaguptaka)、多聞〔部〕 (Mang thos, Bahuśrutīya)、紅衣弟子部 (Gos dmar slob ma, Tāmraśātīya)、分別説部 (rnam par phye ste smra ba'i sde, Vibhajyavādin) は、説一切有部 (Thams cad yod par smra ba, Sarvāstivādin)⁶⁾ である。祇多林部 (rGyal byed tshal gnas, Jetavanīya)、無畏〔山〕住部 ('Jigs med gnas, Abhayagirivāsin)⁷⁾、大伽藍部住部 (gTsug lag khang chen, Mahāvihāravāsin) は上座部である。鷄胤部 (Sa sgrog ris, Kaurukullaka)、守護部 (Srung ba pa, Avantaka)、犢子部 (gNas ma'i bu, Vātsīputrīya) 諸部は、一切所貴部 (Kun gyis bkur pa, Saṃmitīya) の 3 種である。場所 (yul)、意義 (don)、師 (slob dpon) の相違により⁸⁾、分断 (tha dad) は 18 種となった、と説明するのである⁹⁾。

そのように¹⁰⁾、[ヴィニータデーヴァの説く] 4 つの基幹部 (rtsa ba'i sde) のうち、根本説一切有部 (gZhi thams cad yod par smra ba, Mūlasarvāstivādin)¹¹⁾ の師 (mkhan po) は、王族 (rgyal rigs) 出身の御子息、ラーフラバドラ (sGra gan 'dzin bzang po, Rāhulabhadra) 言葉はサンスクリット (sam skri ta) 語で、誦す。袈裟 (snam sbyar, samghati) は、衣幅 (snam phran)¹²⁾ 25 から [2] 9 の間。僧標 (grva rtags)¹³⁾ は、青蓮華 (u tpala, utpala)、紅蓮華 (padma, padma)、宝珠 (rin po che, ratna)、樹葉 (shing lo) 4 つである。大衆部の師は、バラモン族 (bram ze'i rigs) 出身、大カーシユヤパ ('Od srungs chen pa, Mahākāśyapa)。言葉は、アパブランシヤ (zur chag, apabhraṃśa) 語¹⁴⁾ で、誦す。衣幅は、23 から [2] 7 まで。僧標は、貝 (dung)。一切所貴部 (Mang pos bkur ba)¹⁵⁾ の師は、

シュードラ族 (dmangs rigs) 出身、ウパーリ (Nye bar 'khor, Upāli)。言葉は、パイシャーチカ (sha za, paśācika) 語¹⁶⁾で、誦す。衣幅は21から〔2〕5まで。僧標は、ソルチカ花 (me tog so rtsim ka)¹⁷⁾である。上座部の師 (mkhan po) は、貴族 (rje rigs)¹⁸⁾出身の聖カートウヤーヤナ (Ka tya ya na, Kātyāyana)。言葉は、俗 (tha mal pa, prakṛit) 語¹⁹⁾で、誦す。衣幅は、前と同じ。僧標は輪 ('khor lo, maṇḍala)²⁰⁾である²¹⁾。名のある方 (ming 'dogs lugs)²²⁾、マティシャーンティバヴァグブタ (Blo gros zhi ba 'byung gnas sbas, Matīśāntibhavadgupta)、シュリーバドラキールティ (dPal bzang grags pa, Śrībhadrakīrti)²³⁾は、〔説一切〕有部 (yod smra)。ミトラジュニャーナガルバ (gShes gnyen ye shes snying po, Mitrajñānagarbha) と、バドラ (bZang po, bhadra) は、大衆部。一切所貴部では、シーラ (Tshul khriims, Śīla) とチャンドラシンハグブタ (Zla ba seng ge sbas pa, Candrasīṃhagupta)。上座部では、ヴァルマデーヴァ (Go cha lha, Varmadeva)、プーミ (sDe, Bhūmi)、ラクシタ ('Tsho, Rakṣita)、パーラ (sKyang ba, Pāla) とされる具合である。毘婆沙師それについても、場所の観点から、外国師 (Nyi 'og pa, Bahirdeśaka)、カシユミール派 (kha che pa, Kāsmīra) の2つなのである²⁴⁾。三時の実体的素材 (rdzas, dravya, 実有)²⁵⁾として承認する方法の観点から、4つとなる。後に説明するだろう²⁶⁾。部派それぞれの名称の語義は、多きを恐れて、記さない。『思釈炎』において、知るべきである。

II-1-1-2-1-4 slob dpon dul ba lhas ni/shar dang nub dang gangs ri dang/'jig rten 'das par smra ba dang/brtag (read. brtags) par smra ba'i sde pa rnam//Inga tshan dge 'dun phal chen pa//gzhi kun pa dang 'od srungs ste/sa srung (read. ston) sde dang chos srung sde//mang thos gos dmar slob ma dang//rnam par phye ste smra ba'i sde/thams cad yod par smra ba yin//rgyal byed tshal gnas 'jigs byed (read. med) gnas/btsug lag khang chen gnas brtan pa//sa sgrogs ris dang srung ba pa//gnas ma'i bu yi sde rnam ni//kun gyis bkur ba rnam pa gsum//yul don slob dpon bye brag gyis// tha dad rnam pa bcu brgyad gyur// zhes bshad do// de ltar rtsa ba'i sde bzhi las/gzhi thams cad yod par smra ba'i sde pa'i mkhan po ni//rgyal rigs las rab tu byung ba'i sras srag can 'dzin bzang po/skad sam skri ta'i skad du 'don/snam sbyar ni snam phran nyer Inga pa nas dgu pa'i bar/grva rtags u tpala/padma/rin po che/shing lo ste bzhi 'o//dge 'dun phal chen pa'i sde pa'i mkhan po ni//bram ze'i rigs las rab tu byung ba'i 'od srungs chen po//skad zur chags gi skad du 'don//rnam (read. snam) phran nyer gsum pa nas bdun pa yan//grva rtags dung ngo//

mang pos bkur ba'i sde pa'i mkhan po ni/dmangs rigs las rab byung ba nyer bar 'khor /
 skad sha za'i skad du 'dun/snam phran nyer gcig pa nas lnga pa yan/grva rtags me tog
 so rtsi ka 'o//nas brtan pa'i sde pa'i mkhan po ni/tje rigs las rab tu byung ba 'phags pa
 ka tya ya na/skad tha mal pa'i skad du 'don/snam phran snga ma dang 'dra/grva rtags
 'khor lo 'o// ming 'dogs lugs ni/bro gros zhi 'byung gnas sbas//dpal bzang grags pa yod
 smra 'o//bshes gnyen ye shes snying po dang/bzang po bde 'dun phal chen pa//mang
 pos bkur tshul khrim dang/ zla ba seng ge sbas pa yin// gnas brtan pa la go cha lha// sde
 dang 'tsho dang skyong ba 'o//zhes pa ltar ro//bye brag tu smra ba de la yang yul gyi
 sgo nas nyi 'og pa dang kha che pa gnyis so//dus gsum rdzas su 'dod tshul gyi sgo nas
 bzhir 'gyur ste/'og tu 'chad par 'gyur ro//sde pa so so'i ming gi sgra bshad ni mang kyis
 dogs pas ma bris te rtog ge 'bar bar las shes par bya 'o//

注

- 1) 部派名の還梵は、塚本啓祥『初期佛教教團史の研究—部派の形成に關する文化史的考察』昭和41年(以下塚本本と略す)に従った。ヴィニータデーヴァの『異部説集』に出る部派は、塚本本p.429に一覧表で整理されている。
- 2) チャンキヤのテキストは、gangs ri dang/であるが、『異部説集』(北京版、No.5641)は、gangs rir gnas/(^oU, 187b/4-5)、寺本婉雅・平松友嗣『藏漢和三譯對校 異部宗輪論』(昭和49年、初版昭和10年、以下寺本・平松本と略す)所収テキスト(p.40, l.8)も、同じ。寺本・平松本では「雪山に住する(部)」(p.35)と訳す。
- 3) チャンキヤのテキストは brtag par smra ba であるが、『異部説集』は、brtags par smra ba(^oU,187b/5)、寺本・平松本所収テキスト(p.40, l.9)も同じ。チャンキヤのテキストを brtags par smra ba に改める。
- 4) チャンキヤのテキストは、sde pa rmans/ であるが、『異部説集』は、sde pa dang(^oU,187b/5)、寺本・平松本所収テキスト(p.40, l.9)も同じ。
- 5) チャンキヤのテキストは、sa srung sde であるが、『異部説集』が、sa sten sde(^oU,187b/5)、寺本・平松本所収テキストは、sa ston sde(p.40, l.10)である。塚本本の一覧表では Sa-ston(Mahīśāsaka)であった。ここでは、テキストを sa ston sde に改める。
- 6) 本稿では先に登場した gZhi kun pa を「根本説一切有部」、Thams cad yod par smra を「説一切有部」と訳した。塚本本p.429の表では、「根本説一切有部」は「説一切有部」の分派とされている。チャンキヤは、両派を区別しているのか否か判然としない。しかし、両派の異同には様々な議論がある(拙稿「アビダルマ文献の六因仏説論について」『駒沢大学仏教学部論集』第48号、平成29年、pp.361-360の注3)参照)。さらに、ヴィニータデーヴァの記述の仕方、両派を並列しているように見える。gZhi kun pa とは果たして「根本説一切有部」としてよいのか?それとも全く別な部派なのか?判断出来なかった。

(50) チャンキヤ『宗義書』における部派仏教に関する記述 (2) (木村)

- 7) チャンキヤのテキストは、'jigs byed gnas であるが、『異部説集』は、'jigs med gnas ('U,187b/6)、寺本・平松所収テキスト (p.40, ll.11-12) も同じ。チャンキヤのテキストを 'jigs med gnas に改める。
- 8) yul don slob dpon bye brag gis を寺本・平松本は、「教義は阿闍梨の差別によつて」(p.36) と訳す。
- 9) チャンキヤのテキストは、gyur で終わるが、『異部説集』は、gsungs('U,187b/8)「おっしゃる」で終わり、寺本・平松本所収テキストも同じ。
- 10) 以下は、『プトン仏教史』の部派仏教の記述と類似している。『プトン仏教史』 *Bu ston chos byung* (電子テキスト、TBRC, Work No.1934, The collected works of Bu-ston ed. by L. Chandra, vol.24, Śatapitaka series, Ya, 89b-/90a/5, pp.194-195), E. Obermiller, *The History of Buddhism in India and Tibet*, Delhi, 1986, rep. of 1932, p.100、また寺本媛雅『ターラナータ印度佛教史』(昭和49年、初版昭和9年)にも「善逝佛教史」と題し『プトン仏教史』の和訳がある (p.402)。
- 11) 塚本本 p.429 の表に従えば、4基幹部とは、大衆部・説一切有部・上座部・一切所貴部であるが、チャンキヤは「根本説一切有部」を挙げる。これにも謎は残る。前掲注6) 参照。
- 12) 『藏漢大辞典』(北京、1993、民族出版) snam phran の項には「僧衣の幅または部分」 dge slong gi gos bye brag pa'i snam pa 'am gling (p.1594) とある。E.Obermiller は、fringes (p.100) と訳し、寺本氏は「小衣」(p.402) とする。
- 13) 『プトン仏教史』(Ya, 90a/1) では rtags とだけある。E.Obermiller は badges (p.100) と訳す。チャンキヤのテキスト grva rtags を「僧標」と訳してみたが、定見があってのものではない。
- 14) 『プトン仏教史』(Ya, 90a/2-3) では、tha mal pa'i skad で「俗語」という意味であろう。E.Obermiller は、Prakrit (p.100) と訳す。
- 15) 『プトン仏教史』(Ya, 90a/3) では、skye bo mang pos bkur ba で、E.Obermiller は Sammitīya (正量部) と訳す (p.100)。
- 16) 『プトン仏教史』では、ウパーリの言葉を「言葉は、不正規語アパブランシャ語」 skad zur chag pa a pa bram si'i skad(Ya, 90a/3-4) とする。
- 17) 『プトン仏教史』(Ya, 90a/4) は me tog so tsi ka であり、E.bermiller は Sorcika flower (p.100) とし、寺本氏は me tog so rtsi ka に対し「ジャガタラシャボン花」(p.402) と訳す。何れにしろ、手元の辞書には、掲載がなく、筆者には不明のままである。
- 18) 『プトン仏教史』(Ya, 90a/4) rje rigs を E.Obermiller は Vaiçya caste (p.100) と訳し、寺本氏は「貴族」(p.402) とする。『藏漢大辞典』の rje rigs の項には「主家筋もしくは貴人」 dpon rigs sam sku drug (p.911) とあるので、寺本訳に順じ「貴族」と訳した。
- 19) 『プトン仏教史』では、カートヤーヤナの言葉を skad 'bring(Ya, 90a/5) とする。これを E.Obermiller は intermediate dialect(p.100) とし、寺本氏は「中國(摩揭陀)語」(p.402) と訳す。
- 20) 『プトン仏教史』は、「衣幅と標識は、一切所貴部と一致すると知られている」 snam phran dang rtags mang pos bkur ba dang mthun par brag go/(Ya, 90a/5) とある。E.Obermiller

訳は their fringes and badges were known to be similar to those of the Saṃmitīya (p.100)、寺本氏訳は「小衣を標示す。一切所貴部と同じと謂はる」(p.402)。

- 21) 『ブトン仏教史』には、続いて異説が述べられている。「ある者は、大衆部は言葉は中域〔語〕にて誦す言葉〔とする〕。一切所貴部は俗語。上座部はアバブランシャと主張する」kha cig/phal chen pa skad 'bring du 'don pa'i skad/kun gyis bkur ba tha mal pa'i skad/gnas brtan pa zur chag tu 'dod do/(Ya, 19a/5-6)。E.Obermiller 訳は According to same the language of the Mahāsaṃgīkas was the intermediate dialect, that of the Saṃmitīya was prakrit, and that of the Sthaviras-the Apabhraṃṣa (p.100)。寺本氏訳は「或者曰、大衆部は摩揭陀語を話し、一切所貴部は邊土語を話し、上座部は訛語 (Zur-Chog; 不規則語) を話せりと」(p.402)
- 22) ming 'dogs lugs の ming 'dogs は「命名する」等と理解出来るが、lugs を付した場合の訳語には困惑した。H.A.Jäschke, A Tibetan-English Dictionary の lugs の項には、in conjunction with a verbal root or with the genit. of the inf. it often corresponds to the English termination ing (p.548) とある。ここでは、「名のある方」としたものの、確信のない訳である。
- 23) 以下の名前は、インド人学僧であると判断し、対応サンスクリット語で名前を提示してみたが、筆者の知らない名前であり、もとより確証はない。
- 24) 「外国師」「カシュミール派」のサンスクリット名は、『俱舍論索引』第三部 1987 年 (平川彰・平井俊榮・袴谷憲昭・吉津宜英・高橋壯) を参照した。説一切有部の内部分派のことであろうが、筆者の知るところはほとんどない。先学の研究をいくつか紹介しておこう。木村泰賢博士は、以下のように言う。
- 大毘婆沙論の結集は疑いもなく、有部中における一種の新運動に乗じたものである。しかして一これを対外的産物と見る限り、一外道のことは暫く措くとして、これを諸部派の立場からすれば、大衆部、分別部、特に専ら經量部を破せんとするところにあり、これを同部内における地理的關係からすれば、西方毘陀羅師およびその他のいわゆる外国師の立場に当たり、これを同派中の新旧からすれば、旧加濕弥羅師を破り、以って自家の宗義を確立しようとしたのはその編輯の主なる一動機であったということは争うことのできぬ事実である。(木村泰賢「大毘婆沙論結集の因縁について」『木村泰賢全集 第四卷 阿毘達磨論の研究』昭和 53 年、rep.of 昭和 43 年、pp.202-203)
- 静谷正雄氏は、木村説を受けて、外国師、旧外国師、カシュミール有部について、言及している。(静谷正雄『小乗仏教史の研究―部派仏教の成立と変遷―』昭和 53 年、pp.138-140)
- 25) rdzas (dravya) の問題点・訳し方については、拙稿「チャンキヤ『宗義書』における部派仏教に関する記述 (1)」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第 76 号、平成 30 年、p.144 の注 3)、及び「dravyasat・prajñaptisat 覚え書き」『インド論理学研究』III 平成 23 年、pp.105-126 参照。
- 26) 前掲 I の注 4) 池田論文 p.1 のシノプシス参照。チャンキヤの記述は、68b/1-69a/2 で短い。ダルマトラータ (Dharmatrāta, Chos skyob、法救)・ゴーシャカ (Ghoṣaka,

(52) チャンキヤ『宗義書』における部派仏教に関する記述 (2) (木村)

dByangs gshad, 妙音)・ヴァスミトラ (Vasumitra, dByig bshas, 世友)・ブツダデーヴァ (Buddhadeva, Sangs rgyas lha, 覺天)、所謂四大論師の説を示す短いものである。チャンキヤは「この見解によって、芽等それぞれも三時毎に設定されるのだから、芽は未来や過去時にも芽として存在すると主張するのである」(‘di’i lugs kyis myu gu sogs pa re re yang dus gsum gsum du ’jog pas/myu gu ma ’ongs pa dang ’das pa’i dus su yang myu gur yod par ’dod do//68b/1-2) と述べてから、四大論師説を示す。三世実有については、小谷信千代・本庄良文『俱舎論の原点研究 随眠品』2007, pp.111-122 の訳を参照されたい。近時、三世実有に関する優れた研究として、秋本勝『仏教実在論の研究—三世実有説論争—』(上)平成28年が出版された。同書では三世実有が、後世の論理學思想に深く結び付くことを強調する。なお、三世実有研究は、仏教内部に留まっていたは真相は掴めないだろう。その点を指摘した論文として、遠藤康「転変説と時間論に関する『ヨーガ・パーシュヤ』の『俱舎論』依拠」『愛知文教大学論叢』17, 2014, pp.1-22 がある。氏は、結論の1部で以下のように言う。

YBh [『ヨーガ・パーシュヤ』というヨーガ派の文献] が *AKBh* [『俱舎論』] に依拠し、かつ世親を批判していると確認することができる。(p.18, [] 内筆者の補足)

III

II-1-1-2-2 付論 (zhar byung) 57a/1-62b/1

II-1-1-2-2-1 [人格論者への疑問] 57a/1-3, III-(1)

II-1-1-2-2-1-A [2種の回答] 57a/3-58a/4, III-(2)

II-1-1-2-2-1-B [チャンキヤの総括] 58a/4-62b/1, III-(3)

II-1-1-2-2-1-B [チャンキヤの総括] の個所は分量も多く難解なので、さらに細かいシノプシスを付けようと思ったが、結局、果たせなかった。以下では、III-(1), III-(2), III-(3) と分け訳注を進める。

III-(1)

II-1-1-2-2 第2付論において、II-1-1-2-2-1 ある者がかく言う。「一切所貴部・犢子部等は、表示不可 (brjod du med, anabhilāpya, 不可言) の人格 (gang zag, pudgala, 補特伽羅) たる我 (bdag, ātman) を認めたのか、認めなかったのか? 認めたのなら、〔仏陀の〕見解を宣布する4つの印 (四法印、lta ba bkar btags gyi phyag rgya bzhi) ¹⁾ を受け入れないことになるので、彼らは〔仏教〕内部 (nang ba) の定説論者ではないであろう。もしくは、また、〔彼らを仏教徒と

見なせば、これまでの定説と異なる5番目の学説を主張したのであるから]、自派 (rang sde) の4定説〔中観派・唯識派・経量部・毘婆沙師〕としての数え方 (grangs, sāmkhya) が不確定となろう。さて、(ci ste, atha)、認めなかったのなら、多くの典籍で、これらは「人格論者」(gang zag tu smra ba) であると解説されていることと矛盾するのである」と。

II-1-1-1-2 gnyis pa zhar byung la/II-1-1-2-2-1 kha cig na re/ci mang pos bkur ba'i sde pa gnas ma bu pu la sogs kyis brjod du med pa'i gang zag gi bdag khas len nam mi len/khas len na ni lta ba bkar btags gyi phyag rgya bzhi khas mi len par gyur pas/de dag nang ba'i grub mtha' smra ba ma yin par 'gyur ba 'am/ yang na rang sde la grub mtha' bzahir grangs ma nges par 'gyur ro/ci ste khas mi len na ni gzhung du mar 'di dag gang zag tu smra ba yin par bshad pa dang 'gal lo zhe na/

注

1) ネットのウイキペディア「三法印」の解説には、袴谷憲昭「〈法印〉覚え書」『駒沢大学仏教学部研究紀要』37, 1979, pp.60-81と室寺義仁「三法印 (dharmamudrā trilakṣaṇa) : 古典インドにおける三句の發端と展開の諸様相」『東方学報』88, 2013, pp.442-423 が指示されている。両論文ともネットでも披見可能。袴谷論文 p.81 には、チャンキャ『宗義書』の他個所の引用があり、袴谷氏は lta ba bkar btags gyi phyag rgya bzhi を「見解をお言葉となした四つの印章」と訳している。

III-(2)

II-1-1-2-2-1-A この回答について、自派各々 (rang re) の師達の説明の仕方は、一致しない。それについて、①ある師は〔言う〕。「一切所貴部・犢子部・賢道部 (=賢胃部)・クルクツラ (kur ku lla) 部 (=鶏胤部)・法蔵部・上人部 (=説転部) 5〔部〕は、人格は表示不可であることのみを主張するが、人格が〔外道の認める〕我 (bdag, ātman) ¹⁾ であると主張しない。なぜなら、〔彼ら5部は〕「一切法無我」であると主張するからである。さらに、人格も、実体的素材 (rdzas, dravya)・虚構的通称 (btags, prajñapti) ²⁾、何れとも認めていないからである。」

第1の理由支 (rtags zur) ³⁾ (一切法無我であると主張するから)〔について検討しよう〕。彼らの人格が〔五〕蘊と別な状態 (ngo bo, bhāva) であると述べているなら、世尊が一切法無我であるとお説きになったのと矛盾するが、

[五] 蘊と同一であると述べているなら、我が多数となることによって、非難しているので、[そのことは]、「我を表示不可の主体 (brten pa, āśraya) たる行為者 (mdzas, kartṛ) と述べる者である」⁴⁾ と『真理綱要』(Tshad ma'i de nyid, Tattvasamgraha) の偈・注で解説されていることにより、成立しているのである。一方 (la) 後者の理由支 (人格を、実体的素材・虚構的通称何れとも認めていないから) は、『俱舍論』[自]注において、「犢子部等は、人格は存在していると主張する如くであるが、これが、先ず、考察されねばならない。一体、彼らは、実体的素材であると主張しているのか？あるいは、虚構的通称であると主張しているのか？」⁵⁾ ということから、「それは実体的素材だけでもないが、虚構的通称有でもないのである」⁶⁾ と[世親が]説かれたことにより、[その理由支は]、成立しているのである。従って、一切所貴部[等の]5部は、業果 (las 'bras, karma-phala) の拠り所 (rten) たる人格は、表示不可であると認めるが、人格が[外道の]我⁷⁾であると認めないのであり (la)、『思釈炎』等でも、「人格論者」とおっしゃるが、「人格たる我論者」⁸⁾ と[明確には]、おっしゃらないからなのである。それ故、『入中論』(Jug pa, Madhyamakāvātāra) において、「ある者は、それ自体・別物、常住・無常」⁹⁾とおっしゃるのは、帰謬派のようであれば、[犢子部は]、[人格とは]実体的素材有[であると]承認していることになる (song ba) という意味である」とおっしゃったのである。

さらに、②別の師達は、以下のように説明する。「一切所貴部[等の]5部は、人格は我として存在すると主張している¹⁰⁾。なぜなら、a. 彼らは、[自らを]「人格論者」と説くからである。そして、b. [正確には]「人格たる我存在論者」¹¹⁾と説かねばならないが、[一切所貴部等の]自部は「[人格たる我は]存在すると経においても、解説しているからである。そして、c. これ等[一切所貴部等]は、その経が言葉通りで、人格たる我¹²⁾を承認しているのだから、見解の牙 (mche ba) により怪我すると、一切智者世親 (dByig gnyen) が解説しているからである¹³⁾。そして、d『思釈炎』においても、「他の18部は無我論者であり、かつ一切所貴部[等の]5つは、人格論者である」¹⁴⁾と見なすことで、分けている (bkar) からである。そして、e『入中論』の偈・注においても、「人格は実体的素材有であると主張している」と明白に解説しているからである¹⁵⁾。従って、これ等[一切所貴族等]は、人格たる我¹⁶⁾を承認しているのであって、[結果]自部[仏教]は、無我承認という絶対条件に、包含されない[こ

とになってしまう) のである¹⁷⁾ と言う。

さらに、ある師は、「理由は、それ故、一切所貴部 5 [部] の見解を鑑みて (sgo nas)、〔仏教以外の〕他部であると位置付けるのである」とおっしゃるのである。

II-1-1-2-2-1-A 'di'i lan la/rang re'i mkhas pa rnams 'chad tshul mi mthun te/de la mkhas pa kha cig ni/mang bkur gyi sde pa gnas ma bu pa dang/bzang po'i lam pa dang/ku ru ku lla pa dang/chos sbas pa dang/bla ma pa lnga ni gang zag brjod du med pa tsam 'dod kyi gang zag gi bdag mi 'dod de/chos thams cad bdag med par 'dod pa'i phyir dang/gang zag kyang rdzas btags gang du 'ang khas ma blangs pa'i phyir/ rtags zur dang po ni/ de dag gi gang zag phung po las ngo bo tha dad du brjod na/bcom ldan 'das kyis chos thams cad bdag med par gsungs pa dang 'gal la/phung po dang gcig tu brjod na bdag du mar 'gyur bas gnod bas na/bdag brjod du med pa brten pa mdzas zhes smra bar tshad ma'i de nyid rtsa 'grel las bshad pas grub la/ rtags zur phyi ma ni mdzod 'grel las/gang gnas ma'i bu rnams gang zag yod par 'dod pa ji lta bu/'di ni re zhig dpyad par bya ba yin te/ci de dag rdzas su 'dod dam/'on te btags par 'dod/ces pa nas/de ni rdzas su yod pa kho na 'ang min la/btags par yod pa yang ma yin no//zhes gsungs pas grub po// des na mang bkur sde lngas las 'bras kyi rten gang zag ni brjod du med par khas len gyi gang zag gi bdag kha mi len la/rtog ge 'bar ba sogs las kyang gang zag tu smra ba zhes gsungs kyi/gang zag gi bdag tu smra ba zhes ma gsungs pa'i phyir ro//de'i phyir 'jug pa las/kha cig de nyid rtag mi rtag//zhes gsungs pa ni/thal 'gyur pa ltar na rdzas yod khas blangs par song ba'i don yin zhes gsung ngo// yang gzhan dag ni 'di ltar 'chad de/mang bkur sde lngas gang zag gi bdag yod par 'dod de/de dag gang zag tu smra bar gsungs ba'i phyir dang/gang zag gi bdag yod par gsungs dgos kyi rang sde yod par mdo las kyang bshad pa'i phyir dang/'di dag gis mdo de sgra ji bzhin par gang zag gi bdag khas blangs pas lta ba'i mche bas rmas par kun mkhyen dbyig gnyen gyis bshad pa'i phyir dang/rtog ge 'bar ba las kyang/sde pa bco brgyad po gzhan rnams bdag med par smra ba dang/mang bkur sde lnga ni gang zag tu smra bar dmigs kyis bkar ba'i phyir dang/'jug pa rtsa 'grel las kyang gang zag rdzas yod du 'dod par gsal bar bshad pa'i phyir/des na 'di dag gis gang zag gi bdag khas len pa yin cing/rang sde la bdag med khas len dgos pas ma khyab po//zhes zer ba dang/yang mkhas pa 'ga' zhig rgyu mtshan de'i phyir/ mang bkur sde lnga lta ba'i sgo nas gzhan sder 'jog go//zhes gsung ngo//

注

- 1) 先には gang zag gi bdag を「人格たる我」と訳した。訳の統一という観点からすれば、ここでもそう訳すべきなのだろうが、文脈上、意味が掴みやすいと判断し「人格が〔外道の認める〕我である」と訳した。以下でも文脈を考慮し、訳を変える場合がある。その都度、注で示すようにした。
- 2) 実体的素材 (rdzas, dravya)・虚構的通称 (btags, prajñapti) と訳したが、あくまでも仮の訳語である。II の注 25) で示した拙稿参照。
- 3) 『蔵漢大辞典』の rtags zur の項には「理由または論証因の陳述を提示する際、多くの理由因を提示した部分または側面」 rtag sam gtan tshigs kyi sbyor ba 'god pa na'rgyu mtshan du ma bkod pa'i cha shas sam zer (p.1069) とあり、それを参考に「理由支」と訳した。
- 4) 『真理綱要』及び『真理綱要難語釈』の「犢子部批判」の章には、チャンキヤの示す通りの文は見いだせなかった。『真理綱要難語釈』には、以下のような下りがあった。

世尊も断滅論 (chad pa smra ba, ucchedavāda) を否定なさったので、それ故、表示不可の人格が存在すると証明された。

bcom ldan 'das kyang chad pa smra ba bgag pa mdzad pas de'i phyir brjod du med pa'i gang zag yod do zhes bya bar grub pa// (デルゲ版、No.4267, 222a/1-2)

pratiśiddhaś ca bhagavatocchedavāda ity ato'sty avācyaḥ pudgala iti siddham (G.O.S, p.126, 1.9)
- 5) *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu Chapter IX: Ātmavadapratīṣedha*, ed. by J.C.Lee with Y.Ejima, 2005(以下 Lee テキスト) のチベット語訳テキスト (p.39, ll.1-3) では冒頭に 'o na があるだけで、同文である。同書 p.38, ll.1-2 には対応サンスクリット語が示されている。
- 6) Lee テキスト p.41, l.1 のチベット語テキストは、ほぼ同文であるが、微妙に異なるので、相違する個所に下線を引いて、引用しておく。de ni rdzas su yod pa kho na yang ma yin la btags par yod pa yang ma yin no//Lee テキスト p.40, l.1 には、対応サンスクリット語が示されている。
- 7) 訳し方については、注 1) 参照。
- 8) この訳も前の個所とは、違えているが、文脈を考慮してのことである。注 2) 参照。
- 9) *Madhyamakāvatāra* ed by Louis de la Vallée Poussin (Bibliotheca Buddhica IX, 1907-1912, p.268, 1.9, 以下 Poussin テキスト)、瓜生津隆真・中沢中『全訳 チャンドラキールティ入中論』平成 24 年、p.236 に和訳あり。「ある人は、同/異・常/無常」と訳す。注 8) の Poussin テキスト p.268, l.7 には、'phags pa mang pos bkur ba pa「聖なる一切所貴部」とあり、引用句は、一切所貴部批判のためのものである。瓜生津・中沢本は「聖正量部」(p.236) とする。この点については、並川孝儀『インド仏教教団 正量部の研究』2011, pp.38-39 参照。
- 10) 訳し方については、注 1) 参照。
- 11) 訳し方については、注 1) 参照。

12) 訳し方については、注1) 参照。

13) このチャンキヤの説明は、以下に引用した『俱舍論』第9章「破我品」の記述を踏まえたものであろう。

〔悪しき〕 見解の牙 (damṣṭra, mche ba) に傷つけられ (avabheda)、〔良き〕 諸々の業が滅びる (bhraṃśa) のを鑑みて、勝者達〔である諸仏〕は、教え (dharma) を説いた。母虎 (vyaghrī, stag mo) が子供 (pota, phrug gu) を携えていく (apahāra, khyer ba) ように。

サンスクリット語テキスト

drṣṭīdamṣṭrāvabhedam ca bhraṃśam cāpekṣya karmaṇām/
deśayanti jinā dharmam vyāghrīpotāpahāravat// (Lee テキスト、p.104, //.72-3)

チベット語テキスト

lta bas mche bas smras pa dang//las rnam 'jig pa las bltos nas//
stag mos phrug gu khyer ba lta//rgyal pas chos ni ston par mdzad// (Lee テキスト、p.105, //.2-5)

漢訳テキスト

觀爲見所傷 及壞諸善行 故佛說正法 如牝虎銜子 (玄奘訳、大正新修大藏經、No.1558, p.156a/13-14)

觀見牙傷身 及棄捨善行 諸佛說正法 如雌虎銜子 (眞諦訳、大正新修大藏經、No.1559, p.307b/15-16)

この和訳については、櫻部建「破我品の研究」『大谷大学研究年報』12, 1960, pp.80-81、村上真完「人格主体論 (靈魂論) —俱舍論破我品訳註 (二)」『渡邊文磨博士追悼記念論集 原始仏教と大乘仏教』下、p.109がある。渡辺照宏「撰真實論序章の翻訳研究」『渡辺照宏仏教学論集』昭和57年、所収、p.75には、『真理綱要』『真理綱要難語積』に『俱舍論』のこの部分が引かれている、という指摘がある。

14) 『思摂炎』第4章「声聞の説く真實への入門」nyen thos kyi de kho na la 'jug pa を一瞥したが、チャンキヤの文言とピタリと一致する記述は見つけられなかった。しかし、以下のような記述があった。

究極的に空性 (don dam par stong ba nyid, paramārtha-sūnyatā, 勝義空性) 等の無我と相応する経は、聖一切所貴部等が認めないのであり、…そのように、ある者は無我論者である。ある者は人格論者である。

don dam par stong ba nyid la sogs pa bdag med pa dang ldan pa'i mdo ni 'phags pa mang pos bkur ba rnam khas mi lent e/...de bzhin du kha cig ni bdag med par smra ba 'o//kha cig gang zag tu smra ba 'o// (デルゲ版、No.3856, 168b/1-3)

野沢静證「清弁の声聞批判—インドにおける大乘仏説論」『函館女子短期大学紀要』5, 1993, p.206に訳あり。一連の論文として、同「清辨の聲聞批判 (上) —續印度に於ける大乘佛説論—」『密教研究』88, 1944, pp.66-79、同「清弁の聲聞批判—インドにおける大乘佛説論—」『佐藤博士古希記念佛教思想論叢』pp.209-225がある。

15) 『入中論』には、以下のような記述がある。

今や、聖なる一切所貴部等が、想定する人格は実体的素材有であると述べている

(58) チャンキヤ『宗義書』における部派仏教に関する記述 (2) (木村)

のを排斥するために、説明する。

da ni 'phags pa mang pos bkur ba pa dag gis brtags pa'i gang zag rdzas su yod par smra ba
bsal ba'i phyir bshad pa/ (注9) の Poussin テキスト、p.268, ll.7-8)

注9) の瓜生津・中沢本 p.236 の訳を参照した。

16) 訳し方については、注1) 参照。

17) rang sde la bdag med khas len dgos pas ma khyab po を「自部は、無我承認という絶対条件に、包含されない〔ことになってしまう〕のである」と訳したが、誤解を招きかねない訳かもしれない。la の前にある rang sde が bdag med khas len pa によって、khyab されるという構文であろう。直訳すれば、「自部は、無我を承認しなければならないことによって、包含される」となるのが、意味が取り難いと判断し、本訳とした。

III-(3)

II-1-1-2-2-1-B さて、汝〔著者、チャンキヤ〕自身¹⁾は、〔前出の師達の〕前後2つの見解〔①・②〕²⁾のうちで、何を承認しているのか? 述べてみよう。一般に、一切所貴部〔等の〕5つは、表示不可の人格を承認しているのであると、〔①・②〕前後両見解共ご主張なさっていると思われ、ご主張せねばならないことでもある。なぜなら、大学匠 (shing rta chen po) 達が、そのように何度も (cig ma yin par) 回答として解説することは、一致して見られるものとして成立しているからである。5部は、〔以下のような立場となろう。即ち〕、一切法無我であると説く経によれば、「蘊と、異なった状態 (ngo bo, bhāva) の人格は、承認出来ない」と論証しているのだからこそ (ni)、〔異なった状態の人格を認めている5部は〕、〔その経を用いて〕「人格たる我³⁾は非存在であると主張している」と論証することは出来ない。故に、一切法無我であると説く意味は、外道の想定するような蘊とは、別な意味となった無我の意味であると導くということを暗に (shugs kyis) [5部は、力説しているように見えるが]、〔その〔一切法無我を説く〕経は概して、人格たる我⁴⁾が存在すること全般 (tsam) について主張していること〕を、非難しないのであると [5部は]、〔自〕認している ('dod pa) と写るので、何はともあれ (ci nas)、〔非難しないことが〕、人格たる我⁵⁾の存在を主張している証拠 (bsgrub byed) であると思うからである。『中観荘嚴論』(dBu ma rgyan, Madhyamakālamkāra) においても、「一切法無我と説く意味は、サーンキヤ (Grangs can, Sāṃkhyā) 等の見解の实在 (dngos po, vastu) を否定する意味であると、〔人格たる我を承認する〕犢子部により主張されている」⁶⁾と解説するのである。

『俱舎論』〔自〕注において、「それは実体的素材として存在するだけでもなく、虚構的通称として存在するのでもない」⁷⁾と犢子部の主張を陳述する個所を説いていることによっても、その見解は、人格を実体的素材・虚構的通称何れにおいても承認していないのであると証明するのは不可能である。それこそ (ni)、その前提として (gong du)、汝〔犢子部〕は実体的素材として存在すると主張しているのか？虚構的通称として存在すると主張しているのか？と尋ね、両立場に過失を述べる時、それは、実体的素材・虚構的通称どれでもない〔犢子部が〕述べているのだとしても、否定方法は次のようにするとおっしゃっているけれど、犢子部の根幹的意見 (rtsa ba'i khas len) に関し、人格は実体的素材・虚構的通称いずれとも承認していないと、〔世親は〕指摘していないからである。

さらに、同じ (de ka) 文言の、実体的素材有に対して「だけ」(kho na) の語を結びつける一方 (la)、虚構的通称有に対して「だけ」の語を結びつけないことにおいても、〔どっちつかずの誤解を生む〕可能性 (nus) を導く様 ('don lugs) が幾分 (shig) あるからである。そうでないなら (gzhan du na)、『俱舎論』〔自〕注において、経 (lung) 自体の後に、人格の実体的素材有を否定する多くの経 (lung) と論理 (rigs) を説いた事ども (rnams) は、〔犢子部の〕前提主張 (phyogs snga ma, pūrvapakṣa) を非難するもの (gnod pa) でないことになる。それに止まらず、『俱舎論』〔自〕注において、人格の虚構的通称有を示す『ピンビサーラ』経 (gzugs can snying po'i mdo, Bimbisārasūtra) 等の経文 (lung) が、沢山、引用されているのを重んじる (rjes su) 〔はずが〕⁸⁾、これ等〔犢子部等〕は、この典籍を、全く (nyid) 基準 (tshad ma, pramāṇa) となし得ていない。何故か？「これは、我が部派のことを述べていない」と〔犢子部は〕いっていると〔世親が〕、おっしゃっていることに基づいても⁹⁾、それ等〔犢子部等〕によって、「人格は実体的素材有である」と主張されることが成立するのだけれど、『入中論』偈・注の文言 (lung) の意味 (don) 〔つまり〕、帰謬派の論理によって、最高度〔の見解〕に基づき (phul nas)、人格の実体的素材有を承認することになる意味内容 (don) とすることすら ('ang)、〔世親は〕適格であるとは考えていない。なぜなら、その原則 (tshul, naya) は、一切所貴部〔等の〕5部に限らず、毘婆沙師すべてにも、等しいからである。毘婆沙師すべてが、人格は真実 (bden pa, satya) であると主張し、真実の意味は無変化 (tshugs thub) で、また、他に依存しない実体的素材有で

あると中観帰謬派の論理で、追いやること ('phul) が出来るので、一切所貴部〔等の〕5部だけを見て、〔毘婆沙師と〕分ける (bkar) のは、無意味となるからである。

それに止まらず、「これは人格実体的素材有を主張する」と聖一切智者〔ツォンカバ〕が、明瞭に解説しているのである。『入中論大解』('Jug pa'i rnam bshad chen mo) [『密意解明』]において、これ等の主張を陳述する個所で、「その人格は、実体的素材有であるとさらに (yang) 主張しているのである。なぜなら、2つの業の作り手さらに、その2つの果報たる善悪の享受者に他ならないと述べているからであり、そして輪廻に縛られ涅槃する場合、解脱者・度脱者であるからである。」¹⁰⁾とおっしゃっているからである。『入中論』においても、「人格は実体的素材有であると主張する」¹¹⁾と言い、自注においても、「実体的素材有論者を排斥する (bsal ba) ために解説した」とおっしゃるが¹²⁾、「実体的素材有だろう (thal)」と言ったり、「実体的存在有になろう ('gyur)」と〔曖昧に〕おっしゃっていないからである。また、前提主張で述べた典籍自体に現れているからであり、他の立場を否定する論理個所で、彼に存する疑惑が露見し、さらに、最後は他を否定すること等を行うが、前提主張の文言 (gzhung) を整理する際、〔対論者〕彼自身の主張の仕方のみを嘘偽りなく (drang por) 述べることは、インドの師の習慣 (lugs srol) だからである。帰謬派の論理によって、暴き ('phul)・難癖をつける ('tshams) だけ (tsam) でないのは、極めて明らかなことである。

また、犢子部の見解について、その人格は、蘊等の受け手 (len pa po) と捨て手 ('dor pa po) という実体的素材であると主張するので、究極的なもの (don dam pa, paramārtika, 勝義) として成立していると主張する一方で、諸蘊を原因として、人格を設定したにせよ、それで、人格は、虚構的通称有になり得ないと主張することに関して、一切智者世親は、内的矛盾を指摘し、人格とは〔つまるところ〕虚構的通称有であると立証したこと (bsgrubs pa) が、『俱舍論』〔自〕注第9章に、はっきりあるからには、この〔犢子部という〕流派 (lugs) によって、人格は自立 (rang skya) を得た実体的素材有であると主張されていることは明らかに成立するのである¹³⁾。さらに、世尊が、人格たる我¹⁴⁾が存在するとお説きになるのは、長く外道の考えに馴染んだ者 (goms pa) である教化対象により、無我法が示されることを、危惧して (skrag nas) 正しい道に進み得ない者達に、先ず、人格たる我¹⁵⁾は存在すると示すことで、彼ら

の利益 (don) になると深謀し (dgongs) お説きになったのであると、龍樹御父子や聖一切智者〔ツォンカパ〕が解説しているので、人格たる我¹⁶⁾を承認する〔仏教〕内部の者 (nang pa) がいることが成立するし、また、人格は、自立 (rang skya) を得た実体的素材有たる我有としなければならないのは、『入中論大解』において、次のように、「僧達よ。五蘊とは、荷である。荷を担う者は人格である」¹⁷⁾とおっしゃった如くである。これは、人格が自立を得た実体的素材有であると執着する者 ('dzin pa) に尋ねられた場 (ngo) で、それは存在しないと指摘せずして、荷を担う人格が存在すると説いているので、言葉には、直接 (dngos su) ないけれども、意味は実体的素材有のことなのであると明らかにしておっしゃっていて、犢子部は人格たる我¹⁸⁾を承認していることも、引用直後のその文言に依って、『俱舍論』〔自〕注で知られるのである。『観音戒』(sPyan ras gzigs brtul zhugs) によっても、「自部は分裂し、〔そのうち〕、説〔一切有〕部・法蔵部 (chos srung ba)・紅衣部 (gos dmar ba)・犢子部・化地部 (sa ston pa)・法上部・鷄胤部 (sa sgrogs ri pa) の7つは、大部分、人格たる我論者である」¹⁹⁾と説いているのである。従って、18部の内部 (nang tshan) の化地部と経量部は同じであると主張するのも、適切ではないのである²⁰⁾。『中論大注』(rTsa shes tik chen)〔『正理大海』〕において、「16 邪見を確認する個所で、我は昔 (sngon gyi dus na)、生じる・生じない両方でないとする見方 (lta ba)、常・無常両方でないとする見方の悪しき見方の実例 (mtshan gzhi)²¹⁾として、一切所貴部のこの主張法を立てた」²²⁾こと、さらに、『宝行王正論』(Rin chen 'phreng ba, Ratnāvalī) において、「人格蘊論者の世間・サーンキヤ・ヴァイシェーシカの徒弟と」²³⁾等と言う意味を注釈する個所で、同書 (de nyid) 〔〔中論〕大注〕において、「人格唯一 (tsam, mātra) 論者は、自部の人格実体的素材論者のことである。蘊唯一論者は、自部の人格非実体的素材論者であり、蘊実体的素材有論者である」²⁴⁾と言うこと、そして、「三自性 (ngo bo nyid gsum) が、真実として成立する成立しないの相違を分ける唯識 (rnam par rig pa tsam) の法規 (tshul, naya) は、教化対象を次第に、究極的なことを理解させる際、導く (bkri ba) ために、師・悲心者がお言葉を賜る (bka' stsal ba) 未了義 (drang don, neyārtha) の好例 (mthun dpe) として、一切所貴部という人格論者の如し」²⁵⁾と説かれておられることによっても、人格たる我²⁶⁾の存在を説く教化対象にとって、実例として、一切所貴部を立てるべきなのは、聖一切智者〔ツォンカパ〕の御意図 (dgongs pa) と思われるの

である。それらの意味をお考えになって (dgongs nas)、太陽の論者ケードゥブ (mKhas grub smra ba'i nyi ma) が、『タントラ部概説』(rGyud sde'i rnam) において、「概して (spyir) 四法印 (bkar btags kyi phyag rgya bzhi) を承認する・承認しないによって、仏教徒の見解 (lta ba) を承認する・承認しないと認定されていること ('jog pa) に基づけば、声聞部 18 の一切所貴部・犢子部・上人部・法蔵部・賢道部等は、表示不可の人格たる我を承認するので、仏教徒の見解を承認すると認定 ('jog) 出来ないとしても、帰依所 (skyabs gnas, śāraṇa) と戒律 (tshul krim) 等を通じて (sgo nas)、仏教徒と認定されるのである」²⁷⁾ とおっしゃっているし、このことは聖 [ツォンカバ] 御父子に止まらず、古の師達もお認めなのである。雪山の衆の大学匠尊者 (rje btsun) レンダーワ (Red mda' ba, 1349-1412) が、『『思釈炎』において、犢子部・賢道部・一切所貴部・法蔵部・上人部等は、表示不可の人格を認めていると解説しているので、彼らを [仏教内の] 2つの学説論者に加えない (ma 'dus pa) のは、明白である (mngon)。学説論者は両方共、無我論者だからである」と言い、「従って、それら人格論者は、増上戒学 (lhag pa tshul khriṃs kyi bslab pa) を損なわない故に、名目上 (rnam grangs kyis)、仏の教え (bstan pa) に含めるが、増上慧学 (lhag pa shes rab kyi bslab pa) を損なう故に、正しくは教えから除外される者 (phyi rol pa) でもあるのである」とおっしゃり²⁸⁾、同様に文殊サキャパンディタ (Sa skya pa ṅdi ta, 1182-1251) も学説の規定 (grub mtha'i rnam bzhaḡ) としておっしゃり²⁹⁾、諸文言 (lung gi tshig) 多きを恐れ、記さないのである。そのように、外・内の学説論者の違いは、無我の見解を承認する・承認しないによって、設定される。そして、「一切所貴部 5 [部] は、人格たる我³⁰⁾ は存在すると承認していると聖 [ツォンカバ] 御父子等昔現れたインド・チベットの大学匠すべてがお認めになっているのだから、「これ等の部派は、ほぼ (tsam) 自部であり、ほぼ [仏教] 内部の者 (nang ba) だけれども、[仏教] 内部の学説論者そのもの (dngos) ではない」と論ずることについて、直接 (dngos su)、棒 (dbyugs pa) 等の咎め (dnod byed) は起きない。外 (phyin) [からの] 論理によって、咎めを下すのは困難なのである。これは、際立って (shin tu) 困難な状況 (gnas) ではないけれど、後の師達は、他の立場かつ他派と解説することを数多くなされたことに照らして (brten nas)、私は、公平に (gzo bor) あること (gnas) で、若干、披歴した (spros pa) のだが、一切所貴部 5 [部] は、人格たる我³¹⁾ を承認する・承認しない何れでも、我々に、得になったり損に

なったりすること (phan pa dang gnod pa) は、聊かもないので、どの立場をも我々は、愛着する意味 (chags don) も、憎む意味 (sdang don) もないのでございます。

II-1-1-2-2-1-B 'o na khyod rang gis lugs snga phyi gnyis las gang zhid khas len pa yin zhe na brjod bar bya ste/spyir mang bkur sde lngas brjod du med pa'i gang zag khas len par ni lugs snga phyi gnyis kas bzhed par snang zhing/bzhes dgos pa yang yin te/shing rta chen po rnam kyis de ltar lan cig ma yin par bshad par mthun snang du grub pa'i phyir ro//sde lngas/chos thams cad bdag med par gsungs pa'i lung gis phung po las ngo bo tha dad pa'i gang zag khas mi len par sgrubs pas ni gang zag gi bdag med par 'dod par bsgrub mi nus te/des chos thams cad bdag med par gsungs pa'i don mu stegs pas btags pa ltar gyi phung po las don gzhan du gyur pa'i bdag med pa'i don du bkral ba'i shugs kyis lung des spyir gang zag gi bdag yod pa tsam du 'dod pa la mi gnod par 'dod par snang bas/ci nas gang zag gi bdag yod par 'dod pa'i bsgrub byed du snang ba'i phyir ro//dbu ma rgyan las kyang/chos thams cad bdag med par gsungs pa'i don grangs can la sogs pa'i lugs kyis dngos po dgag pa'i don du gnas ma bu pas 'dod par bshad do//mdzod 'grel las/de ni rdzas su yod pa kho na 'ang min la/btags par yod pa yang ma yin no//zhes gnas ma bu pa'i 'dod pa brjod skabs gsungs pas kyang lugs des gang zag rdzas btags gang du 'ang khas ma blangs par bsgrub mi nus te/de ni de'i gong du khyod kyis rdzas su yod par 'dod dam/btags par yod par 'dod/ces dris nas phyogs gnyis ka la skyon brjod pa na des rdzas btags par gang yang ma yin par smras na yang 'gog tshul 'di ltar byed ces gsungs pa yin gyi/gnas ma bu pa'i rtsa ba'i khas len la gang zag rdzas btags gang du 'ang khas mi len par bstan pa ma yin pa'i phyir dang/tshig de ka'i rdzas su yod pa la kho na'i sgra sbyar la/btags par yod pa la kho na'i sgra ma sbyar ba la 'ang nus pa 'don lugs shig yod pa'i phyir ro//gzhan du na/mdzod 'grel las lung de ka'i 'og tu/gang zag rdzas su yod pa 'gog pa'i lung dang rigs pa du ma zhid gsungs pa rnam phyogs snga ma la gnod pa ma yin par 'gyur ro//der ma zad/mdzod 'grel du gang zag btags yod du ston pa'i gzugs can snying po'i mdo la sogs pa'i lung mang du drangs pa'i rjes su/de dag ni gzhang 'di tshad mar mi byed pa nyid do//ci'i phyir zhe na 'di kho bo cag gi sde pa mi 'don to//zhes zer ro zhes gsungs pas kyang de dag gis gang zag rdzas yod du 'dod par 'grub la/jug pa rtsa 'grel gyi lung don/thal 'gyur pa'i rigs pas phul nas gang zag rdzas yod khas blangs par song ba'i don du byed pa 'ang 'thad par mi sems te/tshul de

ni mang bkur sde lngar ma zad bye smra kun la 'ang mthsungs pa'i phyir te/bye brag smra ba thams cad kyis gang zag bden par 'dod pas/bden pa'i don tshugs thub dang/de yang gzhan la rag ma las pa'i rdzas yod du dbu ma thal 'gyur pa'i rigs pas 'phul nus pas/mang bkur sde lnga kho na dmigs kyis bkar don med par 'gyur ba'i phyir/der ma zad/'dis gang zag rdzas yod 'dod par rje thams cad mkhyen pas gsal bar bshad de/ 'jug pa'i rnam bshad chen mo las/'di dag gi 'dod pa brjod pa'i skabs su gang zag de rdzas su yod par yang 'dod de/las gnyis kyi byed pa po dang/de gnyis kyi 'bras bu bde sdug gi za pa po nyid du brjod pa'i phyir dang/'khor bar bcings pa dang myang 'das kyi skabs su thar pa po 'am grol pa po yin pa'i phyir ro//zhes gsungs pa'i phyir/dbu ma 'jug pa las kyang/gang zag rdzas yod 'dod/ces dang/rang 'grel las kyang/rdzas su yod par smra ba gsal ba'i phyir bshad pa zhes gsungs kyi rdzas yod du thal lo zhes dang/rdzas yod du 'gyur ro zhes ma gsungs pa'i phyir dang/de yang phyogs snga mar brjod pa'i gzhung nyid du 'byung ba'i phyir dang/phyogs gzhan 'gog pa'i rigs pa'i skabs su khong na gnas pa'i dogs pa slong pa dang mtha' gzhan 'gogs pa sogs byed kyi phyogs snga'i gzhung 'god pa'i tshe kho rang gi 'dod tshul kho na drang por smra ba ni rgya gar mkhas pa'i lugs srol yin pa'i phyir/thar 'gyur pa'i rigs pas 'phul 'tshams tsam min par shin tu gsal lo// gzhan yang gnas ma bu pa'i lugs la/gang zag de phung po sogs kyi len pa po dang 'dor pa po'i rdzas su 'dod pas don dam par grub par 'dod la/phung po nams rgyur byas nas gang zag 'jog kyang des gang zag btags yod du mi 'gyur bar 'dod pa la kun mkhyen dbyigs gnyen gyis nang 'gal bstan nas gang zag btags yod du bsgrub pa mdzod 'grel gyi gnas dgu na gsal bar yod pas kyang/lugs 'dis gang zag rang skya thub pa'i rdzas yod du 'dod pa gsal bar 'grub po//yang bcom ldan 'das kyis gang zag gi bdag yod par gsungs pa ni gdul bya yun ring por mu stegs kyi lta ba la goms pas bdag med pa'i chos bstan pa la skrag nas yang dag pa'i lam la mi 'jug pa nams la re zhis gang zag gi bdag yod par bstan pas de dag gi don du 'gyur bar dgongs te gsungs par klu sgrub yab sras dang rje thams cad mkhyen pas bshad pas/gang zag gi bdag khas len pa'i nang pa yod par grub cing/de yang gang zag rang skya thub pa'i rdzas yod kyi bdag yod pa la byed dgos pa ni 'jug pa'i rnam bshad chen mo las/ji skad du/dge slong dag phung po lnga ni khur ro// khur 'khur pa po ni gang zag go//zhes gsungs pa lta bu'o//di ni gang zag rang skya thub pa'i rdzas yod du 'dzin pa nams kyis zhus pa'i ngor de med par ma bstan par/khur 'khur gang zag yod par gsungs pas/tshig la dngos su med kyang don ni rdzas yod do// zhes gsal bar gsungs shing/gnas ma bu pas gang zag gi bdag khas len pa yang drangs

ma thag pa'i lung de la brten par mdzod 'grel gyis shes so//spyan ras gzigs brtul zhugs gyis kyang/rang gi sde pa rnam par phye ste smra ba dang/chos srung ba dang/gos dmar pa dang/gnas ma bu dang/sa ston pa dang/chos mchog pa dang/sa sgrogs ri pa dang bdun ni phal cher gang zag gi bdag tu smra ba yin no//zhes gsungs so//des na sde pa bco brgyad kyi nang tshan gis ston pa dang/mdo sde pa geig par 'dod pa yang mi 'thad do//rtsa shes tik chen du/lta ba ngan pa bcu drug ngos bzung ba'i skabs su bdag sngon gyi dus na byung ma byung gnyis ka ma yin par lta ba dang/rtag mi rtag gnyis ka ma yin par lta ba'i lta ngan gyi mtshan gzahir mang bkur ba'i 'dod tshul 'di bzhag pa dang/rin chen 'phreng ba las/gang zag phung por smra ba yi//'jig rten grangs can 'ug phrug dang//zhes sogs kyi don 'grel pa'i skabs su/tik chen de nyid du gang zag tsam du smra ba ni rang sde gang zag rdzas yod tu smra ba 'o//phung po tsam du smra ba ni rang gi sde pa gang zag rdzas su med la/phung po rdzas su yod par smra ba 'o//zhes dang/ngo bo nyid gsum la bden par grub ma grub kyi khyad par phye ba'i rnam par rig pa tsam gyi tshul ni gdul bya rim gyis don dam pa rtogs pa la bkri ba'i phyir du ston pa thugs rje can gyis bka' stsal ba'i drangs don yin pa'i mthun dper/mang pos bkur ba'i gang zag tu smra ba ltar zhes gsungs 'dug pas kyang gang zag gi bdag yod par gsungs pa'i gdul bya'i mtshan gzahir mang bkur 'jog rgyu yin pa rje thams cad mkyhen pa'i dgongs par snang ngo//don de dag dgongs nas mkhas grub smra ba'i nyi mas rgyu sde spyi rnam du/spyir lta ba bkar btags kyi phyag rgya bzhi khas len mi len gyis/sangs rgyas pa'i lta ba khas len mi len du 'jog pa las/nyan thos sde pa bco brgyad kyi mang pos bkur ba dang/gnas ma bu pa dang/bla ma pa dang/chos sbas pa dang/bzang po'i lam pa pa rnams brjod du med pa'i gang zag gi bdag kha len pas sangs rgyas pa'i lta khas len par mi 'jog kyang/skabs gnas dang tshul khirms sogs kyi sgo nas sangs rgyas par 'jog go//zhes gsungs shing 'di ni rje yab sras su ma zad sngon gyi mkhan pa rnams kyang bzhed de/gangs ri'i khrod kyi shing rta chen po rje btsun red mda' bas rtog ge 'bar ba las/gnas ma bu pa dang/bzang po'i lam pa dang/kun gyis bkur ba dang/chos sbas pa dang/bla ma pa rnams brjod du med pa'i gang zag 'dod par bshad bas/de dag grub mtha' smra ba gnyis por ma 'dus par mngon te/grub mtha' smra ba gnyis ka yang bdag med par smra ba'i phyir ro//zhes dang/de bas na gang zag tu smra ba'i sde pa de dag ni/lhag pa tshul khirms kyi bslab ma nyams pa'i phyir/rnam grangs kyis sangs rgyas kyi bstan par bsodus la/lhag pa shes rab kyi bslab pa nyams pa'i phyir/yang dag par na bstan pa las phyi rol pa yang yin no//zhes gsungs shing/de bzhin du 'jam mgon sa skya pa ndi tas kyang grub

mtha'i nram bzhag tu gsungs te/lung gi tshig rnam mangs kyis dogs nas ma bris so//de
ltar na phyi nang gi grub mtha' smra ba'i khyad par bdag med pa'i lta ba khas len mi len
gyis 'jog pa dang/mang bkur sde lngas gang zag gi bdag yod par khas len par rje yab
sras sogs sngon byon pa'i rgya bod kyi shing rta chen po mtha' dag gis bzhed par 'dug
pas/sde pa 'di dag rang sde tsam dang nang ba tsam yin kyang nang ba'i grub mtha smra
ba dngos min no//zhes smra ba la/dngos su dbyugs pa sogs kyi gnod byed ma byung
phyin rigs pas gnod pa 'bab dka' bar 'dug go//di ni shin tu dka' ba'i gnas ma yin mod
kyang/phyis kyi mkhas pa dag gis phyogs gzhan dang gzhan du bshad pa mang du
mdzad par brten nas bdag gis gzu bor gnas pas cung zad spros pa yin gyi/mang bkur sde
lngas gang zag gi bdag khas len dang mi len pa gang gis kyang kho bo la phan pa dang
gnod par 'gyur pa cung zad kyang med pas phyogs gang la 'ang kho bo cag chags don
dang sdang don ni mchis so//

注

- 1) 文脈上チャンキヤを指していると理解した。
- 2) 厳密に言うと、②の末尾に別の師の意見が付加されていたので、3説とすべきかもしれない。しかし、チャンキヤが2説としている以上、3説目も②に含められるのだろう。
- 3) 訳し方については、III-(2)の注1) 参照。
- 4) 訳し方については、III-(2)の注1) 参照。
- 5) 訳し方については、III-(2)の注1) 参照。
- 6) 一郷正道氏の校訂テキスト『中観莊嚴論』には、チャンキヤの本文と似た記述がある。

gžan du ni bye brag tu smra ba dañ/gnas ma bu'i tshul gyi rje su 'brañs nas 'di ni lhul
grañs can la sogs pa'i lugs kyi dños po dgag pa yin no žes 'di bśad mi nus pa ci yod/
(Masamichi. Ichigo, *Madhyamakālamkāra*, 昭和 60 年, p.322, ll.8-11)

これを一郷氏は、次のように訳す。

そうでなければ、毘婆沙師や犢子部の学説に従うことになるから、これ（一切法無自性）は、サーンキヤ学派等の見解の实在をひたすら、否定するものである、とはいえないではないか。（一郷正道『『中観莊嚴論』詩頌および自注』『中観莊嚴論の研究—シャーントラクシタの思想—』昭和 60 年所収, p.190-191)

- 7) 出典等については、III-(2)の注5) 参照。
- 8) 『ピンビサーラ』経は、Lee テキスト p.72, ll.6-8 (サンスクリット原典), p.73, ll.8-11 (チベット語訳) に内容が示されている。櫻部建「破我品の研究」『大谷大学研究年報』12, 1960, p.68、村上真完「人格主体論（靈魂論）—俱舍論破我品訳註（一）」『塚本啓祥教授還暦記念論文集 知の邂逅—仏教と科学』p.283 参照。

- 9) 経を「基準」とするか否かの議論は、Lee テキスト p.78 (サンスクリット原典), p.79 (チベット語訳) にある。前掲注 8) 櫻部論文 p.71 の村上論文 p.284 参照。
- 10) トレースした書名は『大論書入中論解説 密意解明』(*bsTan bcos chen po dbu ma la'jug pa'i rnam bshad dgongs pa rab gsal*) で、チャンキヤの呼称とは異なるが、同書には、全くの同文があった。(TBRC の電子テキスト、タシルンポ版、TBRC Work No.29193, rJe tsong kha pa'i gsung 'bum, Dharmasala, 1997, vol.16, Ma, 235a/3-5, p.468)、なお、福田洋一『ツォンカパ中観思想の研究』2018 序章によれば、『密意解明』は、ツォンカパ最晩年 1418 年の作である。福田氏は、以下のように述べている。
- ツォンカパの中観思想は、その思想体當為の全体を通じて取り組んだ課題であった。それだけにそこに思想的な展開があったと考えるのは自然なことであろう。しかし、ゲルク派の教学において、そのような歴史的視点からの解釈は行われず、ツォンカパの中観思想は、主として、最晩年に書かれた『入中論註密意解明』に基づいて理解されてきた。(福田本 p.17)
- 11) Possin テキスト p.298, l.10、瓜生津・中沢本 p.236 参照。
- 12) Possin テキスト p.298, l.8、瓜生津・中沢本 p.236 参照。
- 13) チャンキヤは、自分の言葉で世親説を整理している。世親説は、前掲注 8) 櫻部論文 pp.61-64、村上論文 pp.276-278 参照。
- 14) 訳し方については、III-(2) の注 1) 参照。
- 15) 訳し方については、III-(2) の注 1) 参照。
- 16) 訳し方については、III-(2) の注 1) 参照。
- 17) TBRC の電子テキスト Ma, 148a/2, p.297
- 18) 訳し方については、III-(2) の注 1) 参照。
- 19) 出典は不明。北京版の目次で検索すると、ピタリ一致する題名のものはないが、観音云々の文献は数種存在する。また、同じくツォンカパにも観音云々の短編はある。
- 20) 「従って、18 部の内部 (*nang tshan*) の化地部と経量部は同じであると主張するのも、適切ではないのである」と訳したものの、意味は理解出来なかった。『観音戒』の記述を受けて、チャンキヤは発言しているが、「人格たる我論者」という点が同じではないと主張しているのか。18 部派でも個々に異なると述べているのか。筆者には、その点が不明であった。さらに「世親は『俱舍論』において経量部である」という伝承を受けての発言の可能性もある。何れにしろ、判断保留とせざるを得ない個所である。
- 21) ここでは、*mtshan gzhi* を「実例」と訳した。チベット仏教文献では、*mtshan nyid*, *mtshon bya*, *mtshan gzhi* と言う 3 用語の組み合わせが、頻出する。しかし、この和訳に関しては、問題が指摘されている。この 3 用語に詳しい、福田洋一氏は、次のように言う。

mtshan nyid, *mtshon bya*, *mtshan gzhi* の用法には共通性が見られる。しかもそれは、従来のように *mtshan nyid* を「定義」、*mtshon bya* を「定義されるもの・所定義」、*mtshan gzhi* を「実例」と訳すような理解とは遠く隔たったものであった。(福田洋一「*mtshan mtshon gzhi gsum* の実例の解説」『インド論理学研究』III, 2011, pp.133-134)

同「初期チベット論理学における mtshan mtshon gzhi gsum をめぐる議論について」『日本西蔵学会々報』49, 2003, pp.13-25 も重要。福田氏の指摘を生かすのなら、「実例」と訳すのは躊躇すべきであろう。しかし、本稿では、文脈上「実例」という訳に不適切さを感じなかったので、あえて訳した。一言だけ付け加えておくと、筆者の知る限り、これらの研究は、チベットでの展開に焦点を当て、その論理学書を軸として考察している。しかし、3用語を使用することは、インドの論理学書にも見られる(拙稿「チベットにおけるプラマーナの定義」『駒沢短期大学仏教論集』2, 1996, pp.232-231の注21))ので、チベットだけに研究を絞るべきではないだろう。さらに、その起源が論理学書以外の文献に由来することは、拙稿「チベット仏教における定義」『駒沢短期大学仏教論集』4, 1988, pp.272-245でも指摘した。インド・チベット横断的な研究が必要であろう。

- 22) トレースした文献名は、『根本中頌般若と言われるものの解説 正理大海』(dbu martsa ba'i tshig le'ur bya shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya msho) でチャンキヤの示す書名とは異なる。また、引用文も現行の『正理大海』の摘記である。『正理大海』には、以下のようにある。

我は過ぐる時、生じる・生じない、その両方と両方でないという4つの見方と、世間は常・無常等に含まれるという世間無常と両方と両方でないとする見方、その8つは、…一切所貴部が人格を常・無常何れでも表示不可であると主張する〔如し〕。

(TBRCの電子テキスト、タシルンポ版、TBRC Work No.29193, rJe tsong kha pa'i gsung 'bum, Dharmasala, 1997, vol.15, Ba, 261a/5-b/3, pp.543-544、以下『正理大海』)

なお、『正理大海』和訳、クンチョック・シタル、奥山裕『全訳ツォンカパ 中論註『正理の海』』平成26年、p.820に訳あり。そこでは、一切所貴部を正量部とする。

- 23) 『宝行王正論』第1章61偈、Michael Hahan, *Nāgarjuna's Ratnāvalī*, vol.1 The Basic Texts(Sanskrit, Tibetan, Chinese)Indica et Tibetica, Bd.1, Bonn, 1982, p.27にチベット訳、p.26にサンスクリット語、p.172に漢訳。Hahan テキストからではないが、梶山雄一・瓜生津隆真『大乘仏典 14 龍樹論集』中公文庫版2004(初出1974)、p.254に和訳あり。
- 24) 『正理大海』には、チャンキヤの引用と全く同文があった。(Ba, 166a/4-5, p.333) 前掲クンチョック・奥山本 p.482に和訳あり。
- 25) 『正理大海』には、チャンキヤの引用にピタリと一致する文言は見つからなかったが、意味合いの近似する文はあった。以下の如し。

それ故「物質は存在しないが、心は存在するのである」言い、さらに「虚妄分別は、自相によって成立しないけれど、他の2性は自性によって成立していると説く唯識派の法規は、一切所貴部という人格論者の如く、師・大悲心者が、次第に、究極的なことを理解させる手段として導くためである。

de'i phyir gzugs med la sems yod do zhes pa dang kun brtags rang gi mtshan nyid kyis ma grub la ng obo nyid gzhan gnyid rang gi mtshan nyid kyis grub par gsungs pa'i rnam par rig pa tsam gyi tshul ni/mang pos bkur ba'i gang zag tu smra b altar ston pa thug rje chen po can gyis rim gyis don dam pa rtogs pa'i thabs su bkri ba'i phyir/(Ba,166a/6-b/2.pp.333-

334)

前掲クンチョク・奥山本 pp.483-484 に和訳あり。なお、上の文で、「自相によって成立している」(rang gi mtshan nyid kyis grub pa) と訳した個所には、最新の研究として、福田洋一「自らの特質によって成立しているもの」『ツォンカパ中観思想の研究』2018 所収 pp.255-288 がある。従来の主な研究を再検討した論考で、その指摘に従えば、「自相によって成立している」は「自らの特質によって成立している」と訳さねばならないだろう。確かに「自相」は、誤解を招きかねない古い漢訳であって、現代語訳を心掛けるべきである。しかし、福田氏の指摘の是非は、筆者自身これから確認する事柄なので、ここでは、自相とした。福田本巻末には、自相に関するこれまでの研究が列挙されているので参照されたい。

26) 訳し方については、III-(2)の注1) 参照。

27) トレースした文献名は、『タントラ部概説詳解』(rGyud sde spyi'i rnam par bzhag pa rgyas par bshad pa) で、チャンキヤの提示するものの具名であろう。そこには、全くの同文があった。(TBRC の電子テキスト、TBRC Work No.29195, mKhas grub rje'i gsung 'bum、タシルンポ版、1997, Dharmasala, vol.10, Ja,19a/7-b/2, pp.255-256)

F.D.Lessing & A.Wayman, *Introduction to the Buddhist Tantric Systems*, Delhi, 1980 (rep.of 1968), p.84, ll.5-10 ローマナイズテキストにも同文あり、p.85 には英訳もある。bkar btags kyi phyag rgya bzhi は、the four Seals (*mudrā*) which define a Promulgation と訳す。

直ぐ後に、四法印について述べているので、引用しておこう。

四法印とは、一切行無常・一切有漏苦・一切法無我・涅槃寂静閑と言うことどもである。(bkar btags kyi phyag rgya bzhi ni/'dus byas thams cad mi rtag/zag bcad thams cad sdug bsngal/chos thams cad bdag med/mya ngan 'das pa zhi zhing dben pa/zhes bya ba rnams so/(Ja, 19b/2-3, p.256) (Lessing・Wayman テキスト p.84, ll.11-13, 英訳 p.85,)

第2句「一切有漏苦」通常の四法印では、「一切行苦」等であり、「有漏」は異なる表現である。ケードゥブジェーは出典も記していないので、謎が残る。Lessing・Wayman 本でも有漏について注記はなかった。

なお、チャンキヤの引用「仏教徒の見解を承認すると設定出来なくても、帰依所と戒律等を通じて、仏教徒と設定されるのである」という言葉は、仏教の多様性を容認するものであろう。佐々木閑氏の「破僧定義の変更によって「異なる意見を持つ者であっても、集団行事を一緒に行う限り、全員を仏教出家者として認定する」という新たな見解が生まれたことが判明したのである」(佐々木閑『インド仏教変移論 なぜ仏教は多様化したのか』2000, p.25) という指摘にも、一脈通ずるようにも思えるのである。

28) レンダーワの引用はトレース出来なかった。レンダーワについては、山口瑞鳳『チベット』下 1988, pp.84-86 参照。ツォンカパとは師弟関係にあり、こう述べられている。

ツォンカパはレンダーワの弟子としてゲルク派を創設すると… (p.282)

レンダーワとツォンカパの緊密な師弟関係は伝記でも触れられている。石濱裕美子・福田洋一『聖ツォンカパ伝』2008 から、直弟子ケードゥブジェー作『信仰入門』の一

(70) チャンキヤ『宗義書』における部派仏教に関する記述 (2) (木村)

説を紹介しよう。

チェツリンにおいて夏の学期が終わり秋になると聖師（レンダーワ）と〔ツォンカバ〕師弟二人はニヤントーのサムリン寺（bsam gling）に学期間の休みに旅されて、〔ツォンカバは〕聖師から『入中論』を一回聴聞された。これは聖師にとって中観思想をお説きになった最初であった。（p.48）

チャンキヤも引用する『入中論』注ツォンカバ作『密意解明』にもつながる話である。

- 29) サキヤパンディタについては、山口瑞鳳『チベット』下の人名索引から、その事績を知って頂きたい。チャンキヤは名を挙げただけで引用は示さない。ここでは、既刊のもの（D.P.Jackson, *The Entrance Gate for The Wise (section III)*, vol.I, Wien, 1987）としてサキヤパンディタ作『学者入門』mKhas 'jug から、犢子部に関する言及を見ておきたい。犢子部が、我の常住・無常について、表示不可であるとするのは、承認出来ない。〔それは〕師によって、不承認の見解とされ悪しき見解に含まれるのである。

gnas ma bu bas bdag rtag pa dang mi rtag par brjod du med do zhes khas mi len pa ni/slob dpon gyis khas mi len pa'i lta ba zhes lta log gi nang du bsdus so// (ibid. p.129, ll.10-12)

D.P.Jackson, *The Entrance Gate for The Wise (section III)*, vol.II, Wien, 1987, p.341

には、次のような英訳がある。

The Vātsīputrīyas who make no affirmation, saying "The self [i.e. the *pudgala*] is unstateable as permanent and impermanent." This [theory] the Ārya [Asaṅga] called "a non-affirming theory" and included it within "mistaken theories."

上のように主張するが、次の発言と照らし合わせた時、不自然さ・違和感を覚えな
いだろうか？

我は常住なのか、無常なのかと問われたならば、我は成立しないのだから、それ
に対して、常住・無常の双方とも成り立たないのであると切り捨てて、答える。

bdag rtag gam mi rtag ces 'dri na/bdag ma grub pas de la rtag pa dang mi rtag pa gnyis ka mi 'grub bo zhes gzhas par lan gdab/ (ibid. p.123, ll.18-20, Tr. vol.II, p.337)

この直後、『俱舍論』第5章「睡眠品」*anuśayanirdeśa* 第22偈が引用される。以下の如し。

mdzod las/mgo gcig dang ni nram phye dang//dri dang gzhas par lung bstan pa// 'chi dang skye dang khyad par 'phags//bdag gzhan la sogs lta bu yin/zhes gsungs pa ltar/ (ibid., p.123, l.20-p.124. l.3)

サンسكريット原文は以下の如し。

ekāṃśato vyākaraṇam vibhaja paripṛcchya ca/sthāpyam ca maranotpattiṣiṣṭātmā'nyatādi vat// (ed. by S.D.D.Śāstrī, Varanasi, 2008 Baudha Bharati Series 7-8, p.627, ll.4-5)

小谷信千代・本庄良文『俱舍論の原典研究 睡眠品』2007, p.96 によれば、和訳は「①一向記、②分別〔記〕、③反詰〔記〕、④捨置〔記〕は、例えば①死、②生、③勝、④自我は別か、等の如くである」である。この『俱舍論』の説に対し、袴谷憲昭氏は「仏教が「アートマン」の一連の同義語によって指示される存在を否認し存在しないものを論理的命題の主語とすべきではないとすることは、存在するものを実体 (dravya) と見做すか否かに複雑な議論があるにせよ、説一切有部のみならず多くの仏

教学派が承認している正統説と言ってもよいであろう」(袴谷憲昭「二十種有身見考」『駒沢大学禅研究所年報』29, 2017, p.83)と評価されている。しかし、筆者には議論を避けるための口実のように見える。入り組んだチャンキヤの文に、垣間見られるのは、1種の「逃げの議論」を嫌う姿勢なのではないだろうか? こうした議論には、論理学上の問題即ち「所依不成」(āśrayāsiddha)という絡みもあるだろう。今の筆者には扱いきれないものだが、ここでは、Toru Funayama, 'On *Āśrayāsiddha*' 『印度学仏教学研究』39-2, 1991, pp.1027-1021 を挙げておく。論理学的見地からの言及の概要はそこに指摘されている。ちなみに、ツォンカパの弟子、ゲドゥンドブ、ダライラマ1世 (dGe 'dun grub, Dalai lama 1, 1391-1474) には、『解脱道解明』(*Thal lam gsal byed*) という『俱舍論』注がある。この度、その全訳が刊行されたので、当該個所の和訳を1部抜き出してみよう。

人我は基体不成立(存在しないもの)であるからである。例えば、石女の子供というのは基体不成立であるので、その〔子供について〕色が白いとかどんなことも記別し得ないようなものである。(現銀谷史明、ガワン・ウースン・ゴンタ『全訳 ダライラマ1世 俱舍論註『解脱道解明』』平成29年、p.423)

和訳中の「基体不成立」は、おそらく所依不成のことだろう。

30) 訳し方については、III-(2)の注1) 参照。

31) 訳し方については、III-(2)の注1) 参照。

〈キーワード〉チャンキヤ、毘婆沙師、宗義書